

"いつでも、どこでも、誰にでも、いつまでも"

一食を捧げる運動 ニュースレター

いっしょに
一食を捧げる運動
wakachiai
sharing meals for friends

VOL. **04**
2018 April

CONTENTS

合同事業スタート

ミャンマーの子どもたちに読書の機会を
シャンティ国際ボランティア会 事務局長●関 尚士さん

親子で取り組む

一食を捧げる運動

一食の精神を大切に親子の実践を紹介——

- 田村祐子さん親子 佐倉教会
- 島本結深さん親子 宇和島教会

【インフォメーション】

【一食人のつぶやき】



習学部 青年ネットワークグループ

今後の予定

キャンペーン

一食啓発月間 5月

「一食を捧げる運動」は通年で取り組ませていただいています。5月を「一食啓発月刊」としています。一食推進用物品や、ホームページ、映像作品等をご活用いただき、「一食運動」を皆さまとともに推進して参ります！

アフリカへ 毛布をおくる運動 4月1日～30日



親子で取り組む ゆめポッケ 6月1日～8月31日



動画

「一食運動」の学習教材等にご利用いただける一食映像作品を紹介します

*映像作品は、各教会にあるパソコンの画面上に設定されているDNA（インターネット映像配信）からご視聴いただけます。

「一食を捧げる運動 同悲と祈りの40年」 (13:15)



一食を捧げる運動は、「いつでも、どこでも、誰にでも、いつまでも」できる運動として、1975年にスタートしました。世界の平和と一人ひとりの幸福を願い、祈りと行動によって継承されてきた歩みを伝えます。

「アフリカへ毛布をおくる運動 30周年記念報告会オープニング映像」 (9:38)



1984年に始まったアフリカへ毛布をおくる運動。何のために毛布を集め、おくり届けるのか。同運動の原点を伝える作品。パートナー団体であるマラウイ赤十字社のスタッフが、毛布を受け取った盲目の女性との出会いを伝えてくれます。

皆さんの声をお聞かせください

一食を捧げる運動ホームページの「お問い合わせ」に、ニュースレターに関するご意見、皆さまの一食エピソード、ご要望など、なんでもお寄せください。



メールアドレスはこちら

info_ichijiki@ichijiki.org

上記のQRコードからでも「お問い合わせ」にアクセスできます。



いちじきひと 一食人のつぶやき



きよちゃん

平成12年入職。28年青年ネットワークグループへ。田舎育ちのためか、東京のペースは速いなあと感じている。布（風呂敷・タオル・ストールなど）が好き。

episode-03

少しでもご恩を...

一食を捧げる運動の推進に関わる「一食人」たちによるコラム。
今回は、この人「きよちゃん」です。

寒修行中に雪が降りました。80人以上の職員が雪かきに参加。後日、そのことを振り返りながら、「人のために何かしたいと思えるようになったのは、校成会の行や一食のおかげさまだね」という話になり、「本当に。以前は、人のことも考えなければ、役に立ちたい、優しくなりたいたいと思わなかった。私、一食に育ててもらっているんだな」と思いました。

私が一食に取り組める理由はいくつかありますが、中でも一食事務局のお役を頂いたこと、そして、以前、父が教会で一食推進委員のお役を頂いたことは大きいと思います。仕事が忙しく、教会にもあまり行けなかった父がお役を受けたと知った時は驚きました。同時に、口下手な父が、心から私を応援してくれていると感じました。父の思いに感謝するとともに、少しでもご恩を返していければと思います。

ミャンマーの子どもたちに読書の機会を



一食平和基金は、シャンティ国際ボランティア会（シャンティ）と合同で、今年から2020年までの3年間、ミャンマーでの移動図書館活動を行います。絵本などいろいろな本を載せた三輪オートバイで公立の小学校を巡り、子どもたちに読書の機会を提供します。



ミャンマー（ビルマ）難民キャンプで暮らす母娘と絵本

文字の読めない母親のマー・ジーさんは、「苦勞ばかりしてきたわ。もし読み書きできていたら違った人生だったでしょうね」と話します。そんなマーさんに、いつも娘が絵本を読み聞かせています。床に腰かけ、娘さんが図書館で借りてきた絵本を開きました。「何読んでるの?」。洗濯物を干していたマーさんが声をかけます。日本語の絵本には、訳文のシールが貼られています。指先の文字を目で追う娘さんに、マーさんが微笑みかけました。「娘は図書館に出会って絵本を読めるようになったの。私よりもっともっと良い人生を送ってほしいわ」。



シャンティ国際ボランティア会
事務局長
関 尚士さん



「共に学び、共に生きる」——それが私たちのモットーです。図書館をつくり、蔵書を増やし、出版活動などを難民自身が運営していくかわりを持たせて頂く中で、私たちは、「共助の力」を教えて頂きました。共に生きるということは、人間としての生き方を取り戻すことでもあります。そして、絵本などを普及する活動は、子どもが本来持っている感性・能力を開き、国の未来を築いていくものです。こうした価値を受けとめて頂いた校成会の皆さまに感謝しております。希望の灯る世界へ、共に歩んでまいりましょう。

公益社団法人
シャンティ国際ボランティア会
アジアの6カ国・7地域で、絵本を届ける運動、絵本の出版、識字教室を含む図書館活動を35年以上にわたって行っています。

軍政から民政に移ったミャンマーでは、経済が発展する一方、貧富の差は広がり、紛争時に発生した難民は帰還できずにいます。新しい国づくりのため、人材育成が求められますが、就学年齢でありながら学校に通えない子どもは58万人以上とされています。ほとんどの公立学校に図書室はありません。こうした状況を背景に、一食平和基金はシャンティと協力して、ミャンマーのバゴー地域で移動図書館活動、教育改善に取り組んでいます。絵本を通して活動地の人々は、文字を覚えることができます。知恵や歴史を学び、視野を広げることもできます。



写真提供・シャンティ国際ボランティア会

一食の精神を大切にする親子の実践を紹介——



島本結深さん親子 宇和島教会

♡お母さん・結深さん (45)

信仰心の篤い夫の家に嫁いだときに、初めて「一食運動」を知りました。いつでも、どこにいても、貧困や紛争に苦しむ人に思いを馳せ、わずかでも支援ができる、素晴らしい取り組みだと感じました。

以来、毎月1日、11日、15日には昼食を抜き、節約分を募金箱に入れています。自営業を営む夫は体力勝負の仕事をしているので、お昼を抜く代わりに、コーヒーや晩酌を控えます。長男（16）と長女（14）が、小学生だった頃は、「一食運動」について「食べるものにも困っている人たちに思いを寄せ、苦しみを分かち合う運動に参加しているの。1円でも5円でも寄付をして誰かの役に立たせてもらうんだよ」と伝えていました。

長女は「一食運動」に心を動かされるものがあったのか、「青年の日」の一食ユニセフ募金に、クラスのお友だちを誘って参加するようになりました。控え目な性格の長女でしたが一食の精神に賛同して、積極的に取り組むようになりました。このお友だちとは中学生のいまも、学校が違っても、連絡を取り合って「青年の日」には募金に立ちます。

「一食運動」を通して、子どもたちや地域社会に、人を思いやる心が育まれ、継承されるようにと、願わずにはいられません。

♡娘・恵梨さん (14)

お友だちが「一食運動」の街頭募金に参加してくれたあとで、「人のためになる活動って、いいね」と言ってくれました。そのとき、誘ってよかったなと思いました。これからも少しでも貧困などで苦しい状況下にいる人の力になれたらいいです。



田村祐子さん親子 佐倉教会

♡お母さん・祐子さん (48)

青年部時代から「一食運動」を続け、20数年になります。育児に追われ、参加できないときもありましたが、教会に行くと、サンガのみなさんと実践でき、そのお陰さまで続けることができました。

毎月、2回の実践の日は、自分が空腹のつらさを味わうことで、ひもじい思いをしている人の苦しみの一端を感じさせてもらっているように思います。

そんななか、三女（12）が「一食運動」に関心をもつようになりました。私と一緒に幼稚園の頃から取り組んできた「ゆめポッケ」の輸送費が「一食平和基金」から拠出されていることを知ったのがきっかけです。三女はかわいい文房具が余分に手に入ると、「海外の子どもたちにあげるんだ」と言って保管していました。自分が携わっていた「ゆめポッケ」と「一食運動」とが関わり合っていることを知り、「一食運動」が身近に感じられたのでしょう。

その後、リビングに置いてある募金箱に、自分のお小遣いのいくらかを入れるようになりました。また、自分が使用しているえんぴつなども、短くなって握れなくなるまで、使い切っているようです。「一食運動」は、自分たちの生活を見つめ直す、ささやかなきっかけにもなっています。

♡娘・有泉さん (12)

お母さんは小銭がたまると、募金箱に献金していました。そんな姿を見ていたので、私もお小遣いから、いくらかを入れるようになりました。お母さんと一緒に、貧困や飢餓で苦しんでいる人たちの国に、平和が訪れるようにお祈りしています。

